# 翔べ麒麟（きりん）

辻原 登

# 翔（と）べ麒麟（きりん）

辻原 登

読売新聞社

著者略歴

**辻原　登**（つじはら・のぼる）……　1945年、和歌山県生まれ。90年、「村の名前」で第103回芥川賞受賞。主な著書に『村の名前』『森林書』『家族写真』（以上文藝春秋刊）、『黒髪』（講談社刊）など。

翔べ麒麟（とべきりん）

一九九八年（平成十年）十月十二日　第一刷
一九九九年（平成十一年）一月十二日　第五刷

著者　辻原（つじはら）　登（のぼる）
© 1998, Noboru Tsujihara
編集人　田口武雄
発行人　黒埼精三
発行所　読売新聞社
東京都千代田区大手町一―七―一　〒一〇〇―八〇五五
大阪市北区野崎町五―九　〒五三〇―八五五一
北九州市小倉北区明和町一―一一　〒八〇二―八五七一
名古屋市中区栄一―一七―六　〒四六〇―八四七〇
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
Printed in Japan
落丁・乱丁本はお取り換えいたします。

# 翔べ麒麟　目次


序　13

一　牡丹なき……　18

二　足止め　46

三　歌姫　71

四　さよなら洛陽　84

五　帝国の秩序　1　100

六　劉小秋　132

七　帝国の秩序　2　137

八　甲斐なき胡曲　146

九　盗まれた手紙　184

十　元宵の夜はふけて　211

十一　騎馬隊騎士　244

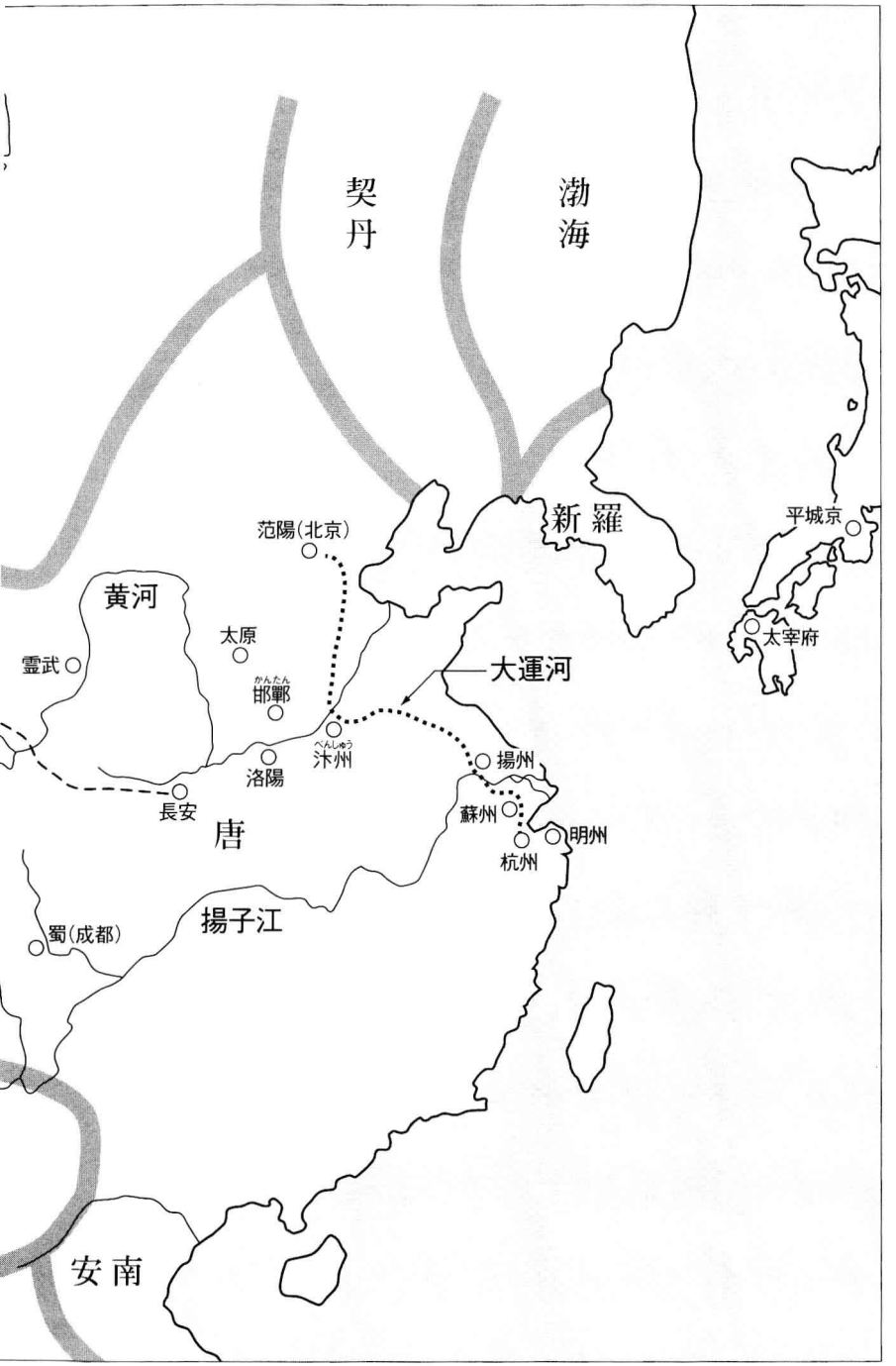
十二　それぞれの秘密　268

十三　邯鄲の乱　293
十四　花影　324
十五　裏切り　342
十六　立ち止まってはいけない　366
十七　夏のくも糸　378
十八　旅立つわれを　387
十九　漂流　406
二十　大会合のあと　418
二十一　死なせて……　437
二十二　挙兵　446
二十三　対決　460
二十四　皇帝の新しい心　473
二十五　真幸逮捕　487
二十六　三人の死に関する短い章　505

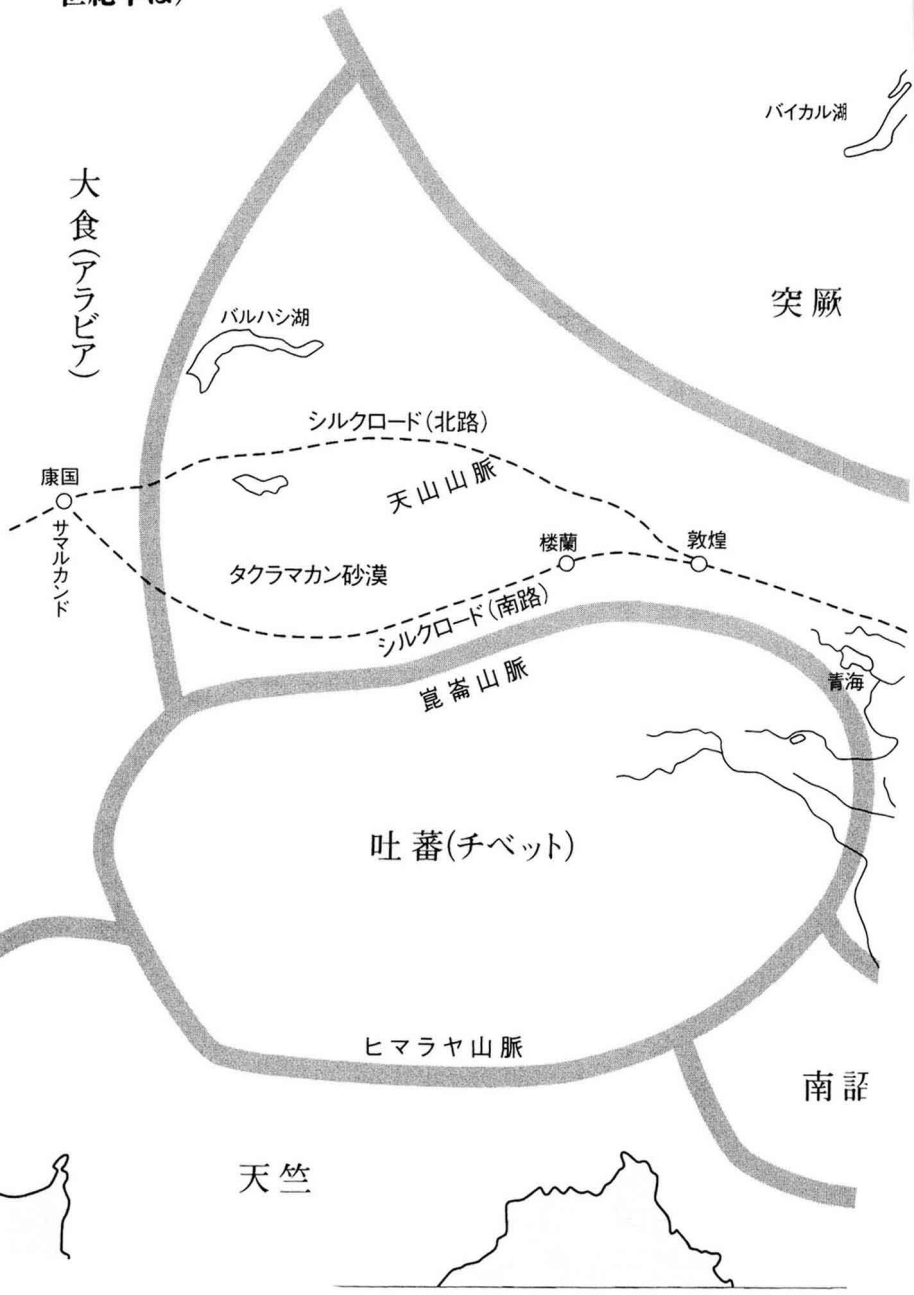
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

二十七　脂のしたたり　509
二十八　大会戦　524
二十九　ためらいつづける最後の雫　550
三十　亡命政権　583
三十一　短く燃えつきる章　597
三十二　春望　599
三十三　安南の軽騎兵　616
三十四　翔べ、麒麟　623

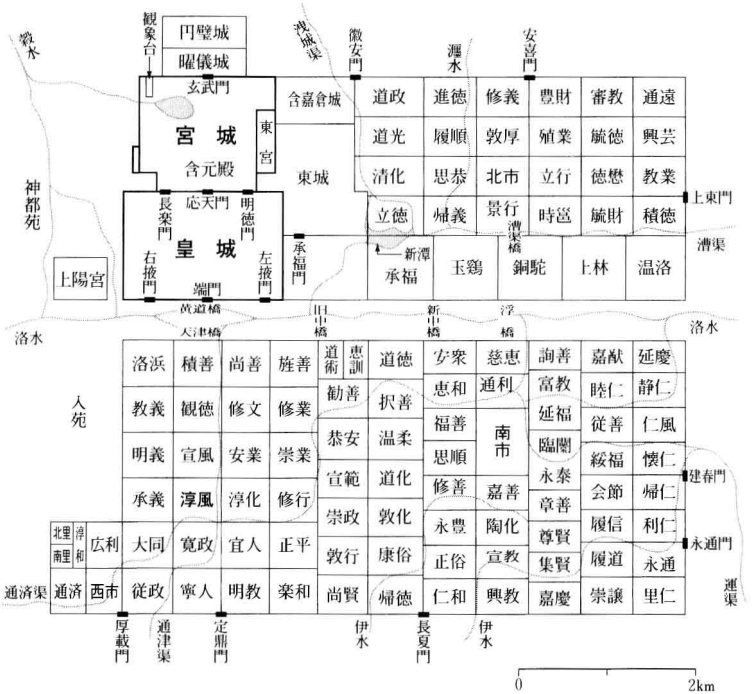
装丁　熊谷博人
装画　傅益瑤
図版　渡辺将史


契丹
渤海
新羅
平城京
太宰府
范陽(北京)
黄河
太原
霊武
邯鄲
大運河
沐州
洛陽
揚州
長安
唐
蘇州
明州
杭州
揚子江
蜀(成都)
安南

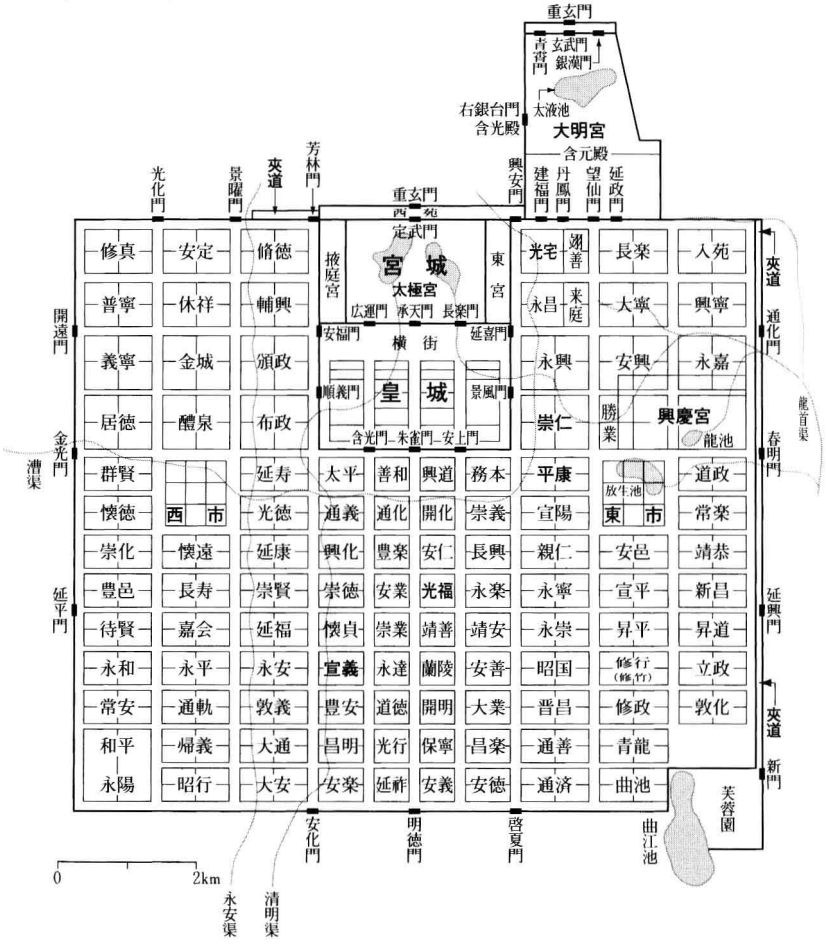
代国際図
世紀半ば)


バイカル湖
大食(アラビア)
突厥
バルハシ湖
シルクロード(北路)
康国
天山山脈
サマルカンド
楼蘭
敦煌
タクラマカン砂漠
シルクロード(南路)
崑崙山脈
青海
吐蕃(チベット)
ヒマラヤ山脈
南詔
天竺

# 洛陽城坊図


円壁城
曜儀城
観象台
玄武門
宮城
含元殿
東宮
含嘉倉城
東城
応天門
明徳門
長楽門
皇城
右掖門
左掖門
端門
上陽宮
神都苑
瀍水
洛水
漕渠
徽安門
瀍水
安喜門
道政
進徳
修義
豊財
審教
通遠
道光
履順
敦厚
殖業
毓德
興芸
清化
思恭
北市
立行
德懋
教業
上東門
立徳
帰義
景行
時邕
毓財
積德
漕渠
承福門
新潭
承福
玉鷄
銅駝
上林
温洛
黄道橋
天津橋
旧中橋
新中橋
浮橋
洛水
人苑
洛浜
積善
尚善
旌善
道術
恵訓
道徳
安衆
慈恵
詢善
嘉猷
延慶
教義
観德
修文
修業
勧善
択善
恵和
通利
富教
睦仁
静仁
明義
宣風
安業
崇業
恭安
温柔
福善
南市
延福
従善
仁風
臨闤
承義
淳風
淳化
修行
宣範
道化
思順
綏福
懐仁
建春門
修善
嘉善
永泰
会節
帰仁
章善
崇政
敦化
永豊
陶化
履信
利仁
北里
南里
淳和
広利
大同
寛政
宜人
正平
敦行
康俗
正俗
尊賢
集賢
履道
永通
永通門
通済渠
通済
西市
従政
寧人
明教
楽和
尚賢
帰徳
仁和
興教
嘉慶
崇讓
里仁
運渠
厚載門
通津渠
定鼎門
伊水
長夏門
伊水
0
2km

# 長安城坊図


重玄門
青霄門
玄武門
銀漢門
太液池
右銀台門
含光殿
大明宮
含元殿
興安門
建福門
丹鳳門
望仙門
延政門
光化門
景曜門
夾道
芳林門
重玄門
西苑
定武門
掖庭宮
宮城
太極宮
東宮
広運門
承天門
長楽門
安福門
延喜門
横街
皇城
順義門
景風門
含光門
朱雀門
安上門
光宅
翊善
長楽
入苑
永昌
来庭
大寧
興寧
永興
安興
永嘉
崇仁
勝業
興慶宮
龍池
放生池
東市
西市
修真
安定
脩德
普寧
休祥
輔興
義寧
金城
頒政
居德
醴泉
布政
群賢
延寿
太平
善和
興道
務本
平康
道政
懐德
光德
通義
通化
開化
崇義
宣陽
常楽
崇化
懐遠
延康
興化
豊楽
安仁
長興
親仁
安邑
靖恭
豊邑
長寿
崇賢
崇德
安業
光福
永楽
永寧
宣平
新昌
待賢
嘉会
延福
懐貞
崇業
靖善
靖安
永崇
昇平
昇道
永和
永平
永安
宣義
永達
蘭陵
安善
昭国
修行(修竹)
立政
常安
通軌
敦義
豊安
道德
開明
大業
晋昌
修政
敦化
和平
帰義
大通
昌明
光行
保寧
昌楽
通善
青龍
永陽
昭行
大安
安楽
延祚
安義
安德
通済
曲池
芙蓉園
開遠門
金光門
槽渠
延平門
夾道
通化門
龍首渠
春明門
延興門
夾道
新門
安化門
明德門
啓夏門
曲江池
0
2km
永安渠
清明渠

## 主要登場人物

**朝衡**（ちょうこう）……日本人**阿倍仲麻呂**。大唐帝国秘書監・衛尉卿。
**藤原真幸**（ふじわらのまさき）……第十一次遣唐大使護衛士。
**藤原清河**（ふじわらのきよかわ）……第十一次遣唐大使。
**吉備真備**（きびのまきび）……同副使。
**大伴古麻呂**（おおともこまろ）……同副使。
**李春**（りしゅん）……科挙進士試験合格をめざす、洛陽の美少年。
**玄宗**（げんそう）……本名・李隆基……大唐帝国第六代皇帝。
**李茉莉**（りまり）……汝陽王夫人。玄宗の姪。
**楊貴妃**（ようきひ）……玄宗の寵姫。実質的な皇后。
**楊国忠**（ようこくちゅう）……大唐帝国宰相。楊貴妃とはいとこ同士。
**安禄山**（あんろくざん）……突厥人とソグド人の混血。平盧、范陽、河東の三節度使を兼任。
**袁木**（えんぼく）……紫禁隊隊長。
**劉小秋**（りゅうしょうしゅう）……袁木配下の女刺客。
**高力士**（こうりきし）……宦官のトップ、内侍省長官。
**新羅王子**（しらぎおうじ）……駐唐・新羅国代表。
**李嵐**（りらん）……洛陽陪都政府秘書監。李春の父。
**高良**（こうりょう）……新羅王子付き駐在武官。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

**張鳩**（ちょうきゅう）……新聞「声なき声」記者。
**白倩倩**（ハクセンセン）……サマルカンド出身の歌姫。
**白飛飛**（ハクフェイフェイ）……サマルカンド出身の舞姫。
**包佶**（ほうきつ）……秘書監室長。朝衡側近。
**儲光羲**（ちょこうぎ）……御史台（検察）監察御史。朝衡側近。
**顔真卿**（がんしんけい）……平原太守。
**王維**（おうい）……詩、絵画、音楽の才能に富む高級官僚。隠棲中。
**郭子儀**（かくしぎ）……汾陽郡王、朔方節度使。
**哥舒翰**（かじょかん）……突厥人蕃将。唐軍総司令。
**李瑛**（りよ）……大唐帝国皇太子。玄宗の第三子。
**精々児**（せいせいじ）……鏡磨き。朝衡配下の隠密。
**米**（ベイ）……ペルシャ人宝石商。
**黄凱**（こうがい）……「声なき声」と「キャラバン・サライ」の経営者。

翔べ麒麟

# 序

月がのぼったので海が匂った。

彼は大きく息を吸いこんだ。胸の中に豊かな香りがみちあふれた。三十七年前にたどりついたのもこの海岸だ。十六歳だった。

あのとき、ここにいて、いま、ここにいる。

かなたにはかくじつに故国がある。しかし、その故国の前には、かくじつに広大な海がある。

もう一度、青年のように生きなければならない、と彼はつぶやいた。

あまのはらふりさけみれば春日なる
三笠の山にいでし月かも

百人一首にも選ばれて有名なこの歌は、七五三年（天平勝宝五）、五十三歳の阿倍仲麻呂が、三十七年ぶりに唐より帰国することになって、船出する前、故国をしのんで詠んだといわれている。

その前年、当時の日本の実権者であった大納言藤原仲麻呂の意を体して、遣唐使が派遣された。僧鑑真を招くという目的もあったが、主目的は阿倍仲麻呂を連れ帰ることだった。

その船団は、遣唐大使藤原清河をはじめとして、副使吉備真備、大伴古麻呂らを乗せていた。

当時、阿倍仲麻呂は、玄宗皇帝の統治する大唐帝国で、秘書監・衛尉卿という要職にあった。名も朝衡と唐名にあらためていた。

彼は、それまでも何度か帰国を願い出ていたが、許されず、このたびは、藤原清河ら遣唐使を日本に送りとどけるという役をおおせつかって、やっと許されたのだった。

しかし、このときも彼は帰れなかった。

遣唐使の船団は四船からなり、彼はその第一船に乗っていたが、沖縄までたどりついたものの坐礁して、他の三船に遅れ、さらに強い北東季節風にあおられて、はるか安南（ヴェトナム）まで流された。第二船に乗っていた鑑真、大伴古麻呂、第三船の吉備真備はぶじ日本にたどりついた。大使の藤原清河は、仲麻呂と共に第一船に乗っていて帰れなかった。

その十七年後、七十歳で亡くなるまで、阿倍仲麻呂はついに故国の土を踏むことがなかった。

……ということを知っている後世の私たちは、本来は、帰国を目前にした、故郷への胸の躍るおもいがこめられていたはずの「あまのはら」の歌を、無念やるかたない望郷の歌、と読むようになったのではないだろうか。

はるか異国で、帰れないまま死んでいった無念のおもい、彼の前にたちはだかる荒海、そのうえに皎々と照りやまない月……、それらが混然一体となって、後世の私たちに鎮魂のおもいをかきたてるのかもしれない。

しかし、もう一度、虚心に、この歌をよみ返してみてはどうだろう。

あまのはらふりさけみれば春日なる
三笠の山にいでし月かも



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.